

「症例 2」変形性膝関節症

男性	73 歳
主訴	右膝痛
現病歴	2 年位前より痛み発症。約 1 年前脳梗塞。現在、血糖値が少し高く、血圧もやや高い、降圧剤、降血糖剤服用中。
所見	硬、右膝熱多少(+)、腫れ(-)、足の火穴総て(+)
治療	火穴総て(+) は自律神経失調症に多く見られるので、自律神経調整処置（照海または復溜、兪府、中脘、気海、あるいはネーブル、腰兪、身柱、手足の趾間穴、足底裏横紋、委中、(陽)、飛陽、崑崙など）、扁桃処置、帯脈、胃の気 3 点。そして右胃の気 3 点と商丘、陰陵泉に施灸。
経過	二回目(2 週間後)少し良い。右行間の圧痛が著明だったので右肝実処置(中封、曲泉、左会陽、右大腸兪)を施し、灸頭鍼(次髎)も加える。 三回目は 1 ヶ月経っていたが痛み大分良い、歩行時痛もよいと。 六回目(84 日目)、歩き、立ち上がりが楽になる、熱も消失。処置は肝実、扁桃、帯脈、胃の気 3 点。 七回目(98 日目)痛み殆んど無くなる。この頃、火穴の圧痛は取れていた。硬は多少変わった。
考察	この患者の病期は中期にあたるでしょう。二人に共通していたのは、まったく偶然でしょうが「硬」を打っていたということ。これは動脈硬化を現す脈です。症例 1 では、血圧が下がり脈は浮いてきました。症例 2 でも硬が多少変化しました。 それから膝のお灸ですが、水が溜まって、熱があるときは、膝のお灸は不可です。火に油を注ぐようなもので、そういう時は、胃の気 3 点と脾経の金、水穴に灸をします。この脾経を使うのは、『新治療法の探究』（医道の日本社刊）の「太陰脾経について」の中で、「脾経は特に粘膜と非常に因果関係の深い経絡であると思われる」と謳っており、実際、脾経は消炎効果があります。